

特集 3. 地球温暖化と住まいのあり方

第 1 回 温暖化による健康被害リスク**

平成 21 年 5 月 28 日

□ 地球温暖化の影響

IPCC の第 4 次評価報告書[†]によると、1906 年から 2005 年までの 100 年間で、地球の平均気温は 0.74 (0.56 ~ 0.92) 上昇したとされています。また、この先 20 年間も、10 年で約 0.2 のペースで気温が上昇するとされています。

周知のとおり、こうした着実な地球温暖化の進行は、海水面の上昇、異常気象、生態系の変化、食糧危機など、われわれの生活に、今後も（環境・社会的な）悪影響を及ぼしていくと予想されるのです。

□ 増大する健康被害リスク

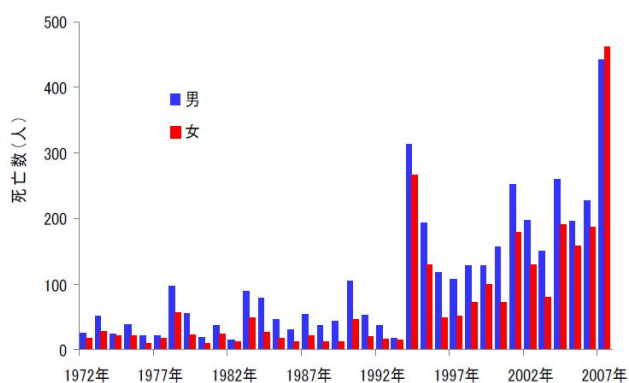
被害の身近さの割りに、大きく取り上げられていませんが、実はこれ以外にも、地球温暖化は人に「甚大な被害」をもたらすのです。それこそが、**健康被害リスク、死亡リスクの増大**なのです。

- ┌ 直接影響 温熱ストレスによる疾患（熱中症 etc.） 暴風雨、洪水などによる死傷
- └ 間接影響 感染症、伝染病被害の拡大、食糧不足による飢餓

□ 増大する熱中症リスク

中でも熱中症被害が増大傾向にあることは、ここ数年で、多くの方が認めるようになったのではないのでしょうか。事実、**図 1**にあるように、熱中症死者数は年々、増加傾向にあるのです。

当然のことながら、気温の上昇と共に、熱中症の発生率は増加します。

図 1 性別熱中症死者数の年次推移¹⁾** 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください。

† 気候変動に関する政府間パネル（国連の下部組織）によって発行された、地球温暖化に関する報告書。

そして、さらに気温が上昇し最高気温が 30 を越えだすと、熱中症の死亡率は急激に上昇していくのです（図 2）。

このことからすると、このまま真夏日や猛暑日の日数が増え続ければ、（特に高齢者を中心として）夏季の死亡率はさらに上昇していくと予想されるのです。

□ 過小評価される生理的負荷

地球温暖化の典型的な影響例は、異常気象、生態系の変化などのグローバルなものであることは間違いありません。

しかし、こうした環境・社会的な被害が強調される一方、着実に被害をもたらしていく身近な健康被害が、あまり大々的に取り上げられないのは、非常に危険なことだといえます。

□ 低断熱・低気密とは言っていない

なぜなら、健康被害の回避方法や、温熱ストレスの時代に適した住まいのあり方について、あまり議論がされなくなってしまうからです。

現に、このような危機管理の視点による家づくり論というのは、あまり活発にはされていません。それどころか、**気候が劇変しているのに**「気候、風土に合った住まい」「伝統的な暮らし方」などと称して、現状の低断熱・低気密住宅をかたくなに支持する技術者さえ多いのです。

では、本当にわれわれは、これまでの居住スタイルを変えなくても良いのでしょうか。今回は、この点について検証してみたいと思います。そして、温熱ストレスの時代に適した住まいのあり方について改めて考えてみたいと思います。

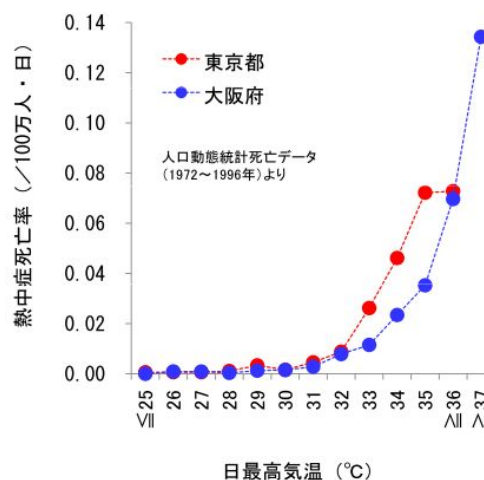


図 2 日最高気温別熱中症死亡率¹⁾

[次回 低断熱・低気密のままではいけない](#)

* 記事の感想をお聞かせください

[アンケート画面へ](#)

参考文献

- (1) 小野雅司. 我が国における熱中症. IGES-WHO International Symposium on climate change and health. 02 March 2009, Kobe, Japan.
- (2) 内山巖雄. 地球温暖化の健康への影響. 人間と生活環境, Vol. 9, No. 2, 7-13, 2002.